

福岡県玄界島の震災復興による島の空間特性の変化と 住民の生活変化に関する研究

A Study on the Change of the characteristics of the space and the residents' livelihood
after the restoration project in Genkai Island, Fukuoka prefecture

○宮崎 祐介¹, 田中 正人², 塩崎 賢明³
Yusuke MIYAZAKI¹, Masato TANAKA² and Yoshimitsu SHIOZAKI³

¹ 神戸大学大学院 工学研究科 建築学専攻

Graduate School of Engineering Department of Architecture, Kobe University

² 株式会社 都市調査計画事務所

Urban Research and Planning Office, Inc

³ 神戸大学大学院 工学研究科 建築学専攻

Graduate School of Engineering Department of Architecture, Kobe University

This study aims to clarify the changes of the characteristic of the space and the residents' livelihood after the restoration project following the West off Fukuoka earthquake. The space of the district has changed drastically and the disaster restoration public housings were constructed. We interviewed 24 residents in the Genkai Island, Fukuoka city. Clarified points are as follows: 1) the restoration project satisfies the residents. 2) 60 % of the residents live in the disaster restoration public housing. Most of the residents without successor selected the housing. 3) Generally the communication has decreased because semi-public space lost.

Key Words : GENKAIJIM, the West off Fukuoka earthquake, Community

1. 序論

(1) 研究の背景と目的

2005年3月、福岡県西方沖地震が起こり、玄界島では人的被害は比較的少なかったものの、島のほとんどの家屋に当たる214棟が一部損壊以上の被害を受けた。またこれらの家屋はほとんどが斜面地に立ち、その斜面地の土台も大きな被害を受けた。復興は、島民による住宅の自力再建が難しく、また島民が速やかな復興を望んでいたため、被害が大きい斜面部の復興は一体的整備を行政に要望することとなった。そこで「小規模住宅地区改良事業」が採用され、これにより事業着手までが迅速に行われ、3年で復興完了し、多くの島民が玄界島に戻ることができた。しかし、この事業により道路基盤や住宅の配置など全面的な空間改変が行われ、島の環境は従前とは全く異なるものとなった。これらの変化は玄界島の生活空間の変化であり、島民の生活に変化を与えたと考えられる。

そこで本研究は、小規模住宅地区改良事業による玄界島の空間特性の変化と、それによる島民の生活の変化を明らかにすることを目的とする。

(2) 研究の方法

事業に関わった行政職員およびコンサルタント等へのヒアリングを通して復興の全体像を把握したのちに、2008年11月・12月の間、計5回玄界島を訪れ、玄界島に住む方24人にヒアリングを行った。

2. 空間特性の変化と評価

空間特性の変化とその内容、またそれに対する島民の評価は表1の様であった。道路やエレベーター、住宅に対しては多くの島民が良い評価をしていたが、畑や個人経営施設に関しては、ほとんどの島民が悪い評価をしていた。

表1 空間特性の変化と島民の評価

空間の変化項目	変化内容	島民の評価
①道路	地震前、車道は沿岸部のみであり、斜面地の道は、縦道は急峻な石段であり、横道は1.5mほどの狭さであった。現在は斜面地を4m幅員の道路が通るようになり、斜面地での車の通行が可能になった。	島内の移動が便利になり、ほとんどの島民が良い評価をしていた。道路に関しては24人中87.5%が良い評価、エレベーターに関しては75%が良い評価をしていた。
②エレベーター	公営住宅の上下移動の為、また島内斜面の上下移動支援設備として設置された。	
③畑	地震前、畑が住宅のある斜面地や山間部に存在していたが、復興事業の影響により、畑面積が減少した。	島の作物の減少が生じ、余暇として畑を開いた人が存在しており、24人中全員が不便を感じていた。
④個人経営施設	地震前は個人が経営する商店や旅館、美容室といった施設があったが、現在は一部商店が再開しているのみである。	地震前、島民は施設を頻繁に使用していた。現在24人中全員が不便を感じていた。
⑤公営住宅	地震前、ほとんどの島民が戸建住宅に住んでいた。現在、アパート型の公営住宅により、119戸が供給され、島民の多くは公営住宅に住んでいる。	自力再建の難しい人々が玄界島で住むことができ、その点でほとんどの島民は良い評価をしている。一方、アパート内で生活に公営住宅に住む島民は不便を覚えている。24人中54.2%が良い評価、4.2%が悪い評価、22.6%がどちらでもない評価をしていた。
⑥戸建住宅	地震前、様々な敷地の戸建住宅や沿岸部の通りに接する住宅も存在した。現在、戸建住宅は全戸南向きで、敷地面積は50坪前後、圍いを設置するなどの統一がされ、また車道整備の為、戸建住宅の高さが増した。	戸建住宅に住む世帯は基本的に満足している。しかし敷地面積や立地が悪化した世帯は不満を感じている。

3. 住宅形式の選択理由と移動実態

住宅形式を選択する理由として、金銭的な理由よりもむしろ、跡継ぎの有無が大きく関わっていることが明らかになった。表2のように、跡継ぎがいる世帯は戸建住宅を選択しており、後継ぎがない世帯は公営住宅を選択している傾向が強かった。

また、地震前後の居住地の移動を調べたところ図1のようであった。移動距離に関しては、現在戸建住宅に住む世帯より公営住宅に移り住んだ世帯の方が、移動距離が長いことが明らかになった。

表2 住宅形式選択理由(複数選択)

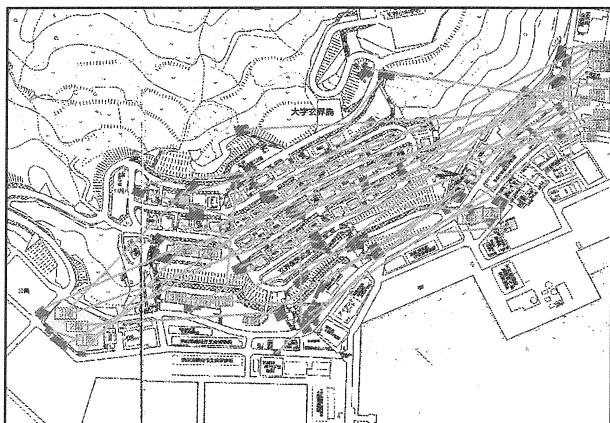
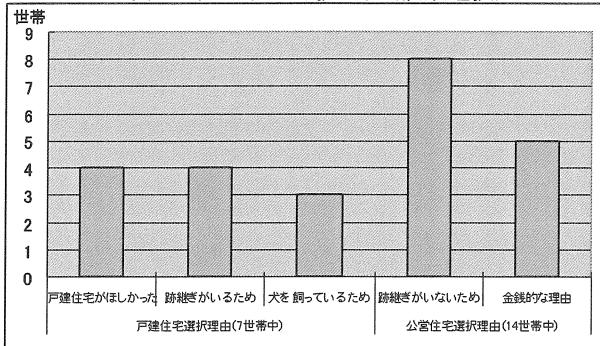
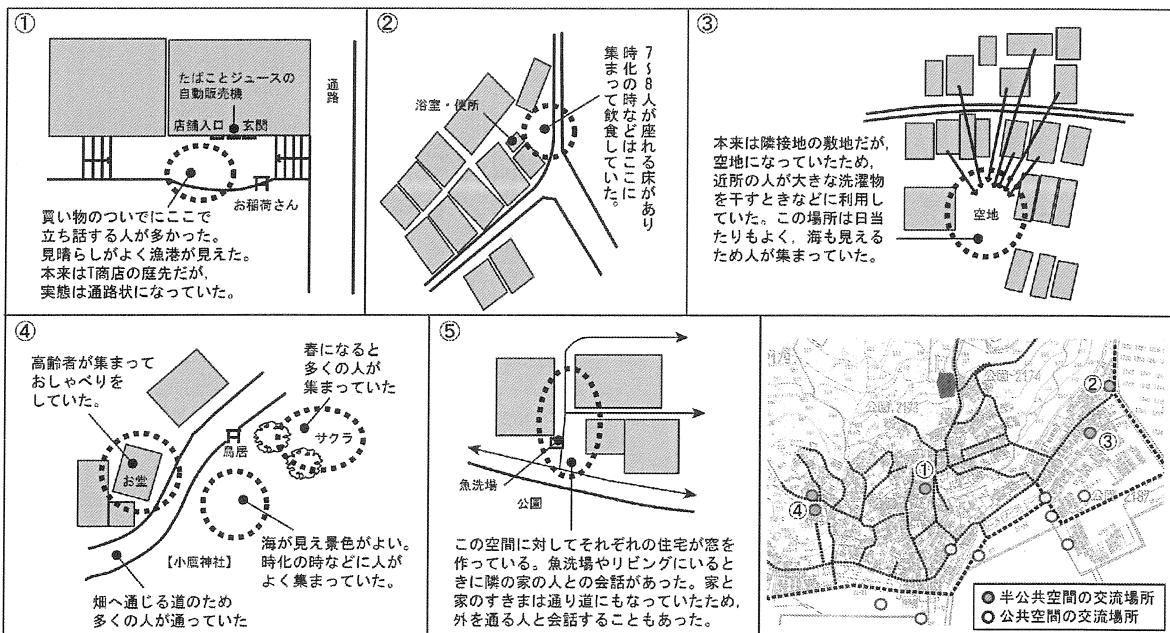


図1 各世帯居住地の移動実態



4. 交流の減少

地震前と比較して、交流の減少を島民が感じていることが明らかになった。交流の場には①住居周辺②移動中③たまり場(本来の目的に付随して発生する交流が生まれる場所)④コミュニティ施設の4類型が存在しており、そのうち①②③は図2の様に、日常的に頻繁に起こる偶発的な交流レベル(偶発的交流)であり、④は交流意志の強い交流レベル(自発的交流)であった。地震前後でこのレベル別の交流を見てみると、自発的交流にあまり変化は見られないが、偶発的交流は大きく減少している。なぜなら、自発的交流はその交流が行われる場所があれば行われる交流である。公民館や老人憩いの家といったコミュニティ施設は地震前から存続しているため、地震前後の変化は見られないと考えられる。一方、日常的に行われる偶発的交流は図2のように、公共空間でも各戸の私有空間でもない、住戸間の隙間や通路といった「半公共空間」で行われていた。現在、この半公共空間は無くなり、そのため①②③の交流場所も無くなっている。これから、偶発的交流は減少したと考えられる。

すなわち、島民の交流が減少としたという評価は、様々な交流レベルが一律に減少したわけではなく、主に偶発的交流が失われたことに対する評価であると考えられる。

5. まとめ

玄界島の震災復興は、基本的に島民も満足しており、評価できる復興であった。しかし今回の調査により、以下の2点の問題点が明らかになった。

1点目として、公営住宅の空き家化である。公営住宅に住む世帯には後継ぎがない為に、現世帯の後に住む人がおらず、将来公営住宅に住む人が少なくなり、空き家化していくかもしれないという不安な点が明らかになった。

次に2点目として、半公共空間喪失による偶発的交流の減少が生じていることが明らかになった。